

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第36回：第4章-その8-

## サステイナビリティ

著：二階堂哲  
企画：渡辺修宏  
小幡知史  
二階堂哲

### 漫画はネタ切れ...

正直に言うと、本当に困っている。このシリーズが続くとは思わず、軽い気持ちで引き受けてしまった。もう紹介できる漫画がない。

前回は、加藤伸吉『バカとゴッホ』を取り上げた（第30回：第4章-その2- 対人援助学マガジン第61号，231ページ～ <https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol61/40.pdf>）。

これ以外に夢中になって読んだ漫画は、『風の谷のナウシカ』くらいである。

宮崎駿の『風の谷のナウシカ』は、1984年に劇場版が公開された。私たちの世代であれば、テレビ放映などで何回も目にしているであろう。私はたぶん小学校6年生くらいのときに劇場版を観て強い衝撃を受けた。我が家には漫画禁止というルールがあったにもかかわらず、親に懇願して漫画を買ってもらった記憶がある。

風の谷のナウシカの主要なテーマは、人と自然の共生、そして戦争や人間の愚かさである。

### 持続不可能な社会

私は毎日、片道20kmの距離にある職場まで車で通勤している。1日に使うガソリンの量はおおよそ2Lだ。石油がどのような過程で生成されるのか、私にはまったく分からない。けれど、私が往復1時間の通勤で使ったガソリンは、何千年、数万年もかけて海底に沈殿した生物が作り出したものなのだろうと思う。そう考えると、これほど貴重な資源を、日々あまりにも当たり前のように消費してよいのだろうか、という疑問が湧いてくる。どう考えても、生命や地球にとって持続可能なあり方とは言えない。

食事も同じだ。いま飲んでるコーヒーの容器は、石油から作られているのだろうし、中身のコーヒーも、中南米のどこかで生産されたコーヒー豆を、遠く日本まで船で運んできたものかもしれない。

ウルリッヒ・ブランとマークス・ヴィッセンは、このような「普通の暮らし」を「帝国型生活様式」と名付けて、資源の収奪や文化や生態系の破壊の温床だとしている。そう、この暮らしは、どう考えても持続可能ではない。私が日常の些細な場面でこうしたことを考えてしまうのは、『風の谷のナウシカ』の影響が少なからずあるのだと思っている。

## 対人援助職の持続可能性

持続可能性という視点は、対人援助職にとっても重要なテーマでもある。

労働には、3種類あるらしい。肉体労働、頭脳労働、感情労働だ。対人援助職は、とくに感情労働の面で困難を伴う。人と人が関わる現場では、感情的な摩擦が避けられない。その摩擦が蓄積し、限界を超えたとき、援助者はバーンアウトし、現場を去ることになる。

感情と感情がぶつかり合う対人援助の現場で、いかにして持続可能に働くか。正解は、無限にあると思うけれど、一つを、私はナウシカの生き方に見ている。

象徴的なのが、ナウシカとキツネリスのテトが会うシーンだ。野生のテトは、凶暴でナウシカの指に噛み付く。ナウシカは、痛みを感じながらも、優しく「こわくない、こわくない」と語りかける。するとテトは逆立てた毛をゆるめ、傷口を舐めはじめる。そこでナウシカは、「怯えていただけなんだよね」と母親のような母性で受け入れてしまうのである。ここには、直情的に反応せずに全てのことを平静に受け入れるマインドフルネスと、相手を慈しむコンパッションがある。

対人援助において、この二つは支援される側のためだけでなく、援助者自身を守るためにも欠かせないスキルだと感じている

ナウシカは噛まれたけど...

—つづく—